

また、ヒーラーをしている人、なろうとする人は、よほど自らの鎮魂を深め、靈魂の力を高く保っておかなければ、治療する相手の病気を受けてしまうことに、気をつけなければならぬ。生半可な「気」の力や、低級な靈による治療では、自分の方に病気を引き受けてしまうことも多々あるのである。

鎮魂を深め、自らの靈魂が力と強さを持つていれば、高級靈の助けもあつて、手をかざせば、スパークするように相手の病気が吹っ飛ぶのである。これが「祓い」の真髄とも言える。修行時代、私は仲間たちと、お互いの手指を近づけて、どちらの波動が強いかを試したものである。相手の波動が強いと、電気のような感覚が手から腕に入ってくるのがわかる。このように、靈魂の力や気の力が弱いと、病人の悪い波動がこちらに侵入してきて、自らが病気になってしまうのである。

若い頃に体験した「奇跡」の治癒

ヒーリングの話になったので、私自身の体験を記しておこう。

私は、若い頃、まだ神靈の何かも知らぬままに、大きな奇跡的治療を二度経験している。

一つはほかの人に癒やされる体験、もう一つは自分が癒やす側の体験である。

最初のもは、十八歳の時のことである。

前にも触れたように、私は結核を患い、肋膜炎を併発して、昏睡状態になった。今で言う「臨死体験」もした。八月も終わろうとする頃だった。

なんとか蘇生して、数日後のこと、産土神社の神職の馬場真次郎という老翁が尋ねてきた。幼い頃からよく存じ上げている小柄の老翁は、いつになく厳しい顔で、

「ご当家の若が大病と承りお見舞いに参上しました。昨夜のこと、夢枕に神様が現われて、私の老骨の生命と引き替えに助けてくださるとのお言葉。謹んでお伝え申し上げます」というのであった。

馬場翁は、真言宗の家に生まれ、自らも信仰篤く育った人であった。小豆島巡拝八十八度、四国巡礼七度をなし、朝夕の礼拝は二時間をくだらなかつた。大祓詞を神前に捧げ、仏前には般若心経を捧げ、念持仏の不動明王の前では不動真言を奏上していた。それでいて彼は神社神職の免状を持った産土神社の神主であった。

炯々と輝く眼光で彼は「起きておすわりなさい」と命令する。その威厳に打たれた私は、